階級闘争と教育運動

―― 教育運動に於ける階級性 ――

小　山　孝　直

教育とは、何よりも、成長し発達する人間にかかわるものである。然し乍ら、その人間は、観念のうちに、何か或種の理想像として在る人間、或いは、この現実世界のそとに、うずくまっている抽象的な存在ではない。教育のかかわる成長し発達する人間とは、飲み且つ食わねばならない実際に生きている人間、即ち、歴史的社会的発展過程に於て、社会的諸関係の総体を、自己自身の本質、人間的本質としている類的存在としての人間なのである。ここに云う社会的諸関係とは、諸個人の各々が、生きる為のその物質的生活の生産の際に、相互にとり結ぶと共に、そこにおいてのみ各々の生産が可能となる歴史的に条件づけられた労働の普遍的な交通としての生産諸関係であり、それに規定される意識の交通としての精神的諸関係である。そこで、抽象的・一般的ではあるが、教育を規定して云うならば、この社会的諸関係をとり結ぶ歴史的社会的な過程である労働において、労働を通じて、その総体（人間的本質）を、諸個人の各々が、言語と労働生産物（両者は共に、歴史的社会的な所産乃至成果であって、社会的諸関係の契機あるいは客観的形態であり、人間の諸能力の客観的形態である）を介して内面化しつつ、潜在的な諸能力を顕現し、類的存在として成長・発達する総体的な過程と云えよう。つまり、教育とは人間の社会的な総合的過程としての成長・発達なのであって、人間の全ての社会的諸活動は教育的機能をもつものである。従って、教育は、その性格を社会から受け取る。即ち、階級社会に於ては、教育は、いかなる美辞麗句で語られようと、本質的には階級的な教育、支配階級の階級支配の機能として在るのである。

資本制社会、特に、自由競争を通じて資本・生産の集積が進み、独占段階に至った資本制社会、つまり、帝国主義段階に達した資本制社会においては、教育は、主に、近代公教育として、制度的に整備された学校教育と社会教育によって、その中心が構成される意識的に計画的且つ組織的な形態を、そして制約されてはいるが大衆的な性質をもつ。さて、学校教育制度には、就学義務を伴なう無償の初等教育が基礎に据えられているが、この無償の初等義務教育とは、即ち、資本制社会が、その独占段階に至る過程に於て、資本家階級がその階級利害の下に、除々にではあるが意識するようになった大衆教化の必要としての資本家階級の教育要求、端的に云うならば、資本制生産様式の諸要求を自明な自然法則として認めている賃金労働者、つまり資本家階級が必要とする程度の形態にその労働力を発達させていると共に、資本制社会に幻想をもち、資本家階級に従順な、効率的に搾取し得る賃金労働者の育成と云う教育要求と、労働運動が従来から提起している人間的要求としての労働者階級の教育要求と云う相対立する階級の相互に矛盾する教育要求を、社会的な教育要求とし、

それに応じて、社会を代表し社会の諸矛盾・対立を調停する権力である国家が、しかし本質的には、幻想的共同体であり、経済的に有力な、支配する階級の階級支配の道具である国家が、基本的には資本家階級の利害に従って、資本家階級の教育要求を反映して整備するものであって、厳密に云うならば、政治的経済的諸要求を提起する労働者階級の闘争に直面した資本家階級が、労働者階級に譲歩しつつ彼らをその支配体制、帝国主義的体制の内に積極的に編入する必要から、教育に関しては、労働者階級の教育要求に応じつつも自己の階級の教育要求を、それに公共性の幻想を与えて実現すべく国家を介して整備する大衆的教化機関である。この様な無償の初等義務教育を基礎として、資本家階級がその政治的経済的支配権を維持強化するに必要な教育が、中・高等教育として整備され、学校教育制度が編成される。初等教育と中・高等教育とのつながりが形式的・制度的にはいかなるものであれ、労働者階級とその子供達は、中・高等教育から実質的に排除されており、それ等は、買われ得る商品として、資本家階級によって事実上独占された教育である。勿論、労働者階級は、中・高等教育への機会を得るべく、又拡大すべく要求し闘争すると共に、資本家階級もそれに対応するが、その対応は労働者階級を懐柔する為になされる譲歩であると同時に、資本家階級がその支配体制を維持・強化するに必要な人材を、労働者階級からも補充する限りでのことであり、この場合学校教育の制度は、差別と選別の制度として機能するのである。

制度的な学校教育、特にその大衆的な形態にある初等教育の対象の多くの者は、労働者階級とその他の勤労人民の子供達であって、諸闘争を実際に展開している労働者自身ではない。彼らは、学校教育による教化の範囲の外に在る。それ故、資本家階級は、学校教育、特に初等教育によるだけでは、その教育要求を充分に満し得ないのであって、ここに社会教育の意義があるのである。社会教育は、子供達をも含めたあらゆる年齢層の労働者・勤労人民を対象とする、学校教育外の大衆教育・教化の手段として、資本家階級の意を受けて、国家等の公権力によって、厳密には、それ等の諸公権力を通じて、資本家階級によって組織され、主にそれは、帝国主義段階にある資本制社会において、その対立が一層明確且深刻になった二つの国民、その一方である資本家階級に敵対して諸闘争を展開している労働者階級の意識を、そして、この労働者階級を中心に、彼らと共に、他方の国民を成す全ての勤労人民の意識を、資本家階級のイデオロギーによって、民族主義的、或いは愛国主義的、又軍国主義的等々に、形成し、労働者・勤労人民を、帝国の盲信的な一体化された国民、つまり、客観的にも主観的にも政治・経済の主体である資本家階級に対して、客観的には政治・経済の客体であるにもかかわらず、資本家階級と同様の主体であると、主観的に誤って確信している国民たらしめようとするものである。

更に、資本家階級は、青・少年、特にその殆んどの者が近い将来に賃金労働者と成ることを不可避的に予定されている労働者・勤労人民の子供達に、積極的且つ効果的に資本家階級のイデオロギーの影響を与え、彼らを資本家階級にとって望ましい形態に秩序づけ訓練すべく、諸々の私的な青・少年組織が、資本家階級の直接・間接の指導・援助によって、組織される。

資本制社会における教育、公教育の領域に属するものであれ、その領域外のものであれ、全ての組織的な教育（活動）には、階級性が、資

本家階級の利害が反映されており、更に、全ての社会的諸条件・社会事象（そこにおいて無意識的な教育が為される）もまた、労働者階級とその子供達の成長・発達にとって、決定的に否定的である。　従って、資本制社会における全ての教育は、労働者階級が、それに対して自覚的且つ組織的に抵抗しない限り、もっぱら資本家階級の独占的機能のままに留らざるを得ない。

階級支配の機関として資本家階級の独占的機能である教育に対する労働者階級の自覚的且つ組織的な抵抗、それは、現実的には、抑圧され、制約された成長・発達の基盤であると同時に、それを拡大する社会的諸条件を含めた教育全般に於ける階級的に規定された諸差別を実質的に廃棄し、子供達と全ての諸個人の全面的発達を目標として、その実現に必要な諸条件を創出すべく、何よりも先づ教育の階級性の認識にもとづいて、資本家階級に独占されている教育を、労働者階級の手に取り返す、つまり、教育の制度上の、又それをとり巻く社会的諸条件の改革を追求する運動である。労働者階級のこの抵抗運動は、従って、本質的に、共産主義・革命を、その展望のうちにおさめた運動である。何となれば、共産主義は、全面的発達をその原理としているからである。

共産主義、それは、端的に云うならば、人間の普遍的解放乃至普遍的な人間的解放、それ故に全ての諸個人の普遍的な類的存在としての現実的に自覚的な成長・発達、つまり、世界史的に疎外されている人間的本質の回復・獲得、或いは、人間的本質の世界史的規模での疎外の止揚の為の物質的諸条件の創出であり、またその回復、獲得乃至止揚そのものとしての現実的運動であって、共産主義は、そのために、現存せる生産諸力を占有せねばならないが、この生産諸力は一つの総体へと発展しており、普遍的な交通の内にのみ存在するが故に、生産諸力を占有する共産主義は、まさにその生産諸力とそれが存在する交通に対応した普遍的性格、つまり国際的性格を持たねばならないと共に、その占有は、それ自体において、物質的生産諸用具を駆使するに充分な諸個人の能力の発展、諸個人それ自体における一つの総体としての能力の発展を意味するが故に、共産主義は、まさに、能力を総体的に発達させ、疎外を止揚し、普遍的に解放された諸個人、つまり、全面的に発達せる諸個人に条件づけられていると同時に、その様な諸個人を、その過程を通じて、生み出すのであって、それ故に、全面的発達を、それ自身の原理としているのである。

全面的発達を目標とし、それ故に、共産主義・革命をその展望の内におさめた労働者階級の教育をめぐる自覚的且つ組織的な抵抗運動は、従って、自己自身の階級意識を意識化乃至自覚している労働者階級の階級闘争の一環を担うものとして、それと結合されていなくてはならず、また、運動それ自身において、その結合が意識されていなければならない。何となれば、自己自身の階級意識を意識化乃至自覚している労働者階級の階級闘争とは、即ち、自己の階級の歴史的使命の自覚のもとに、自己の階級的諸利益を追求して自己の階級の人間的解放を実現し、それを通して、普遍的な人間的解放を達成するべく、それ故、全ての諸個人が普遍的で自覚的な類的存在として現実的に成長・発達することが可能となるべく展開される闘争、従って、共産主義社会の実現を究極的な目標として、共産主義革命を意識において展開される闘争に他ならないからである。従って、労働者階級の教育をめぐっての抵抗運動は、教育の領域における階級闘争、即ち、教育闘争である。

資本制社会における労働者階級の教育闘争が、階級闘争の一環を担い、それと結合された闘争として、階級闘争の全般的な連関のうちにおいて、階級闘争全般にとって果たす役割、それは、なによりも、意識をめぐってのイデオロギー的闘争の一形態であって、階級意識の確立・陶治を基礎的に担うものである。即ち、資本制社会において事実上資本家階級によって独占されている教育の全般的な階級性を客観的に確証し明示しつつ、公教育、特に学校教育をめぐっては、労働者階級の階級意識の基礎陶治、つまり、階級意識の系統的な確立のための基礎的な役割を、学校教育に担わせるべく展開される闘争であり、全般としては、労働者階級とその子供達が、まさに自己自身の階級意識を獲得し、系統的に陶治するに必要な計画的且つ組織的な教育を確立する闘争である。

さて、教育闘争がその確立・陶治を基礎的に担う階級意識、労働者階級の意識化された階級意識、それは、《社会の本質の客観的且つ普遍的認識、つまり、社会の科学的認識であると同時に、労働者階級の自己認識》として、疎外（物象化と云う一般的疎外、賃金労働、搾取等の階級的疎外）の認識、つまり、労働者階級の諸個人の各々にとって、疎遠で敵対的な諸力の本質が、各々の相互に他者ととり結び、構成する社会的諸関係の総体であることの認識、疎遠で敵対的な諸力のもとに疎外されている自己の人間的本質・自己自身の意識化、それ故に、労働者階級の疎外された形態において獲得される普遍的な自己意識、或いは、自己が本質的には普遍的な類的存在であるにも拘らず、実際的には疎外され制約された類的存在であることの自覚であり、そして、《社会的発展の矛盾の意識化、階級の歴史的状態の意味の意識化、歴史的に必然的なものの表現》として、資本制社会の革命的変革の必然性の認識、つまり資本制社会の客観的諸条件の潜在的可能性としての革命性の認識であると共に、労働者階級自身が、まさにその革命的変革、共産主義革命の主体的契機であることの自覚である。それ故、労働者階級は、自己の階級意識を意識化することによって、自己を現実的に革命化すると共に、資本制社会の客観的諸条件の潜在的な革命性を顕在化し、共産主義革命を遂行するのである。ところで、労働者階級が、疎外された形態においてではあるにせよ、獲得する普遍的な自己意識である階級意識は、同時に、将来の共産主義社会において全面的に発達している諸個人、普遍的で自覚的な類的存在として現実的に成長・発達している諸個人の各々の意識の領域における全面的発達、或いは、全面的発達に不可欠な契機の一つとしての普遍的な自己意識の歴史的先行形態でもある。換言すれば、労働者階級は、その階級意識を自覚することによって、資本制社会においてすでに、意識の領域での全面的発達を達成するとも云い得るであろう。

全面的発達と云う教育闘争の究極的な目標は、共産主義の原理であり、まさしくそれ故にこそ、教育闘争は、共産主義・革命を、その視野のうちにおさめているのではあるが、さて、教育闘争は、全面的発達を可能ならしめる諸条件を創出する共産主義・革命に不可欠な労働者階級の階級意識（意識における全面的発達。全面的発達の不可欠な契機の一つである普遍的自己意識の歴史的先行形態）の確立・陶治を基礎的に担い、そうすることによって、共産主義・革命を実現し、それ自体の究極的な目標を達成するのである。従って、労働者階級は、その意識化せる階級意識に基づいた階級闘争において、共産主義の原理である全面的発達の実現を目指す教育闘争を欠落させ得ないのであって、

端的に云うならば、教育闘争は、単に階級闘争と結合され、その一環を担うに留まるのではなくて、階級闘争の主要形態の一つと云えるであろう。

階級闘争の主要形態の一つとして階級意識の確立・陶冶を基礎的に担う教育闘争は、先に述べたところに従って、先づ、階級意識の系統的な確立のための基礎的な役割を学校教育に担わせるべく展開されるものとしては、科学性と集団主義を学校教育のもとに具体的に位置づける、或いは、科学性と集団主義を原則として学校教育を改革する闘争である。科学性は、社会の本質を客観的且つ普遍的に認識し、資本家階級のイデオロギーの幻想性・虚偽性を見抜くのに必要な教育要素であり、集団主義は、子供達が類的存在であることを確証しつつ自覚的に成長するのに必要な教育の形態である。つまり、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件である様な集団を構成する子供達の協同の諸活動、全ての子供達が等しく参加する諸活動は、子供達の各々に、個々人が集団と、また社会と不可分であり、相互媒介的であることを意識させると共に、子供達の間に同志的連帯を、そしてその意識を形成することを可能ならしめる。ところで、この集団主義こそ、民主々義の本質的な原則である。集団主義を本質的原則とする民主々義、云うなれば、原則的な民主々義とはあらゆる特権の打倒として、それ故、人権の徹底的な獲得・拡大として、あらゆる被抑圧人民大衆の抑圧・支配からの解放としての民主々義、従って、資本家階級の民主々義——平等を法の前の抽象的平等に制約し、自由をモナド的な私的個人の私有財産の自由とし、そして、封建的特権に換えて富の特権を温存している民主々義——に対抗して、それを克服する民主々義、そのための闘争によって共産主義革命への準備をしなくては、革命も社会主義も実現し得ず、また、勝利した社会主義が、それを完全に実現することなしには、その勝利を保持しつつ共産主義へ移行し得ない様な民主々義である。このような民主々義の本質的原則が、集団主義なのであって、それ故に、集団主義の教育は同時に、それ自体に於て、民主々義的訓練乃至民主々義的意識の陶冶である。

教育闘争は、また、労働者階級とその子供達が、自身の階級意識を獲得し、系統的に陶治するに必要な計画的且つ組織的な教育を確立する闘争としては、科学性と集団主義を原則とする労働者階級の自己教育活動を、そして、青・少年のピオニール活動を、公教育の領域外で、資本家階級が主導権を握る諸々の組織的教育活動に対抗して、組織する闘争である。さて、これ等の教育闘争のもとに位置付けられた教育の諸形態は、現実を捨象したものではあり得ない。即ち、資本制社会の現実－階級的諸矛盾・対立、そして階級闘争を、理論的・実践的に追求せねばならないのであり、そうすることによってのみ、階級意識の基礎陶治が具体的に達成され得るのである。

ところで、教育労働者として労働者階級に属する教育労働の専門家である教師は、先づ、自身の階級意識を自覚した労働者としては、その労働の性格に規定されて、革命的インテリゲンツィアであり、従って、教師は、無自覚な教師、労働者に働きかけて、彼等に彼等の階級意識を自覚させるべく活動すると同時に、全ての自覚的な労働者と共に階級闘争を推進するが、また、自覚的な教育労働者としては、教育闘争の中心的・指導的な層の主要な構成員として積極的に活動すると同時に、階級闘争全般と教育闘争とを有機的に結合させねばならないのである。それ故に、教師は、自覚せる階級意識に基づいて、

自己を革命的に組織すると共に、組織的に活動する使命を持つのである。

自覚的な教師をその中心的・指導的な層の主要な構成員とする労働者階級の教育闘争は、それがまさしく労働者階級の階級闘争の一主要形態であるが故に、それをめぐっての労働者階級の統一戦線を要請する。この統一戦線に基づいてのみ教育闘争は、強力に展開され得る。だが、教育闘争は単にそれだけに留まるのではなくて、全ての諸個人の全面的発達と云うその究極的な目標の普遍性の故に、またそれが遂行する諸改革の対象である教育、つまり資本家階級の事実上の独占的機能である教育、特にその大衆的な諸形態は、まさにあらゆる階級とその子供達を対象としているが故に、現存する教育の革命的・民主的改革を求める勤労人民をそこに結集することを要請する。つまり、教育闘争は、それ自身をめぐっての人民戦線の成立を要請する。然し乍ら、教育闘争に於ける人民戦線は、階級的に無原則な所謂国民教育運動とは異なって、労働者階級の階級闘争の一主要形態として、原則――労働者階級の階級意識に基づき、共産主義・革命をその展望及至視野におさめていると言う原則を堅持しているのであり、更に、自覚的な労働者階級の要求・指導性が、又、労働者階級に属する教育労働者である教師、特に自覚的な教師の革命的インテリゲンツィアとしての指導性が、そこには、明確に徹底されているのである。

統一戦線、そして、人民戦線の成立を要請する労働者階級の教育闘争は、従って、資本制社会における資本家階級の階級的利益に合致した反人民的な階級的教育に対抗して、労働者階級の階級的利益に合致し、更にそれに基づいて、支配され抑圧されている勤労人民の利益に応じた、革命的な階級的教育を提起し、確立する闘争に他ならない。

労働者階級が、階級闘争に究極的に勝利し得るか否かは、将来を担う青・少年、労働者・勤労人民の子供達が、革命的な労働者階級と共に歴史過程のうちに自覚的に在るか否か、つまり、青・少年が革命的に組織されているか否か、と云う点に依存しており、それ故に、労働者階級にとっては、資本家階級による青・少年組織(活動)――戦争への危険を、多かれ少なかれ、常に可能的に孕んでいる帝国主義段階にある資本制社会におけるものとして、本質的に好戦的な、愛国主義的且つ軍国主義的な青・少年組織――から、子供達を守り、取り返し、科学性と集団主義とを原則とし、反戦・平和を基調とした青・少年組織を、青・少年のピオニール組織(活動)を確立することが、その教育闘争のなかでもとりわけ、急務である。そしてまた、そのピオニール組織には、まさしく反戦・平和を基調として、労働者・勤労人民と共に活動し闘争する任務がある。即ち、ピオニール組織の反戦・平和を基調とした諸活動は、そこにおいて、また、そこから、教育闘争の統一戦線、そして人民戦線が成立する回転軸として機能せねばならないのである。